

令和 3 年 6 月 22 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K04543

研究課題名(和文) 教師力(タクト) 熟達の日独比較 - 学校日常の緊急性・不確実性対処に関する実証研究

研究課題名(英文) A Japanese-German Comparison of Teacher Competence (Tact) Proficiency: An Empirical Study on Coping with Urgency and Uncertainty in Daily School Life

研究代表者

鈴木 晶子 (Suzuki, Shoko)

京都大学・教育学研究科・教授

研究者番号：10231375

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では学校日常における教師の「課題対処メカニズム」について、日独フィールド調査およびパフォーマンス分析を実施した結果、(1)教師個人の力量だけでなく、チームや組織としての力量発揮を配慮した課題対処法が重視されている実態、(2)認知主導型のドイツに比し日本では共感型主導型の特徴をもつこと、(3)二項比較による解決法をとるドイツに対し、日本では生徒、保護者、教師ら総ての当事者の成長や学びに繋がる「三方よし」の原則を目指す傾向にあること、(4)熟達した教師ほど、授業場面での状況認知や構造的な理解、自らの働きかけが及ぼす影響について予測や想像力が教師のパフォーマンス最適化に重要であることが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は教師の課題対処のメカニズムを歴史人類学的手法を用いて解明することにより、教師力・タクトの働きの具体を捉え、その熟達のための方策を示し得た点、また問題対処において、日本の教師の三方よしの解決法の意義およびその文化的背景としての組織やチームの運営におけるその定性的特徴を明らかにした点で、暗黙知や身体知をはじめ教師力としてのタクトの働きに関する研究関心の米、欧州での高まりのなか、極めて高い学術的意義を有する。また、日独の現場教師の協力を得て実施した本研究は、現場教師の課題対処力の向上に資するものであるとともに、他の医療やケアのプロフェッショナル養成にも資する成果を得た点で社会的意義を有する。

研究成果の概要(英文)：This study was conducted a field survey in Japan and Germany and the performance analysis of teachers' "problem-solving mechanisms" in daily school life from the perspective of historical anthropology and found that (1) problem-solving methods that consider not only individual teachers' competence but also the competence of teams and organizations are emphasized, (2) compared to Germany, which is cognitively driven, that Japan is characterized by an empathy-driven approach, (3) in contrast to Germany, where the solution method is based on a binary comparison, Japanese teachers tend to aim for the principle of "Sampo-Yoshi", which derives a solution that is satisfactory to all parties involved. Here means, that it leads to the growth and learning of all parties, including students, parents, and teachers, and (4) predicting and imagining of teachers give the impact of their work on classroom situations was found to be more important in optimizing teachers' performance.

研究分野：教育哲学、歴史人類学

キーワード：タクト パフォーマンス ミメシス プロフェッショナル養成 熟達 課題対処法 教師力 暗黙知

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

教師の学校日常は、授業実践、学級経営、生徒指導それぞれの課題だけでなく、それらが相互に関係した課題対応に関わる判断と決断の連続によって成り立っている。問題発生後の対応だけでなく、課題が問題として浮上することを未然に防ぐための処理方法には、教育活動に特有の構造契機を踏まえた専門性が要求される。医学、生理学、心理学、治療的、福祉的、そして何よりも教育的アプローチについての専門的知見が必要となる。教育活動においては、生徒や保護者への万全な対応が原則とされる。エラーがあってはならない。しかも、常時対応可能な状態を保持し、待機可能であること、緊急事態にも応えられることが期待されている。生徒一人ひとりとはもとより、学級、学年、組織としての学校それぞれが互いに連関しながら日々刻々と変化する学校日常において、その予測の及ばない不確実性を抱えた教育活動を運営していくために、教師は多大な心理的・道徳的重圧にさらされている。しかし、教師の職務に特有のリスクマネジメントの必要は認識されているにもかかわらず、それが、授業実践から学級経営、生徒指導など教育専門職の教師力の前提となっているという意味で基本的条件であり、職務上の希望や苦悩、不安、恐れ、期待などが交錯した最深層において、教師の技術の基盤をなすものとして、総合的な教師力養成の観点から十分に検討が進んできているとはいえない状況である。

本研究は、教育活動に特有の性質である、緊急性と不確実性を要する学校日常の実践における構造契機について、日独フィールド調査を実施し、教育専門職としての「課題対処メカニズム」とその対処法を、教師への聞き取りや、教師自身によるパフォーマンス分析法による振り返りを通して解明するべく推進してきた。

2. 研究の目的

本研究は、教師の専門性及び実践力（教師力ないし教育的タクトと総称）について、緊急性と不確実性を抱えた学校日常の実践分析と問題状況への教師の対処法の抽出を目的として、日独フィールド調査を実施する教育人類学的研究である。この状況マネジメントにおける様々な配慮や判断、決断など対処メカニズムを可視化し、教師力熟達支援プログラムを開発することを目指した。具体的な目的は、第一に、日独の小学校で教育実践における緊急性と不確実性の要素抽出とその対処法の事例集積、第二に、教職の経験値向上に係る対処メカニズムの構造分析、第三に教育実践のパフォーマンス分析法による教師力熟達支援プログラムの開発の3点に集約される。

3. 研究の方法

(1)日独学校教師への聞き取り調査の実施

京都市およびベルリン市の学校で、教師へ聞き取り調査

学級事務、学級実践、授業実践、生活指導、安全指導、給食指導、保護者懇談など教師の学校での業務全体に係る活動分野ごとに対処法について、教師の実践をビデオグラフィーにより記録しパフォーマンス分析を実施。

(2)教職の経験値向上に係る対処メカニズムの可視化

初任者、中堅、管理職の教師への半構造化インタビューを実施

教職キャリア形成に係る研修の担当者および研修受講者への聞き取りの実施

教育職の特有の対処メカニズムの要素抽出と教職熟達度との連関を分析

(3)教育実践のパフォーマンス分析法による教師力熟達支援プログラムの開発

4. 研究成果

(1)日独の教師とも、学校日常における業務全般にわたる日々の対応は複雑で、2つ以上の業務を並行して処理していくためのマネジメント力が求められている実態が浮き彫りにされた。また、近年ではチームあるいは組織としての対応が求められる状況のなかで、チームの一員、組織の一員として自らの教師力を臨機応変に対応させていく観点が強く求められてきていることが日独の共通課題として認識された。保護者への対応をはじめ、いじめや発達障害など特別な配慮を必要とする生徒への対応など、単発的な対処で済まないような、継続的、連関的な教育課題が増えてきている。場合によっては、1学期、あるいは1年、さらには複数年にわたって生徒の個々の学校での様子、さらには生徒の置かれた家庭的、社会的環境に配慮した対応が必要となるケースも多い。また、保護者自身が抱える問題状況が色濃く反映された形で発現するケースも増えてきている。十分に対処しきれなかったケースについて、その課題を教師個人の単なるミスとして片づけるだけでは問題の解決に至ったとはいえない。そのような事態を再び招くことがないよう、再発防止のためのチームないし組織の体制整備が必要となる。管理職においては、このようなチーム、組織での対処法をマネジメントの一環として取り入れる工夫がここ数年特に議論的となっている様子が、日独の共通点として明らかになった。ただし、ドイツでは、管理職のマ

ネジメントは主に表立った指導すなわち認知主導型のリーダーシップを前提としている傾向がある。それに対し、日本では感情表出ないし共感主導型のリーダーシップともいふべき対処法が明瞭に見受けられた。生徒、保護者、直接かかわっている教師、その教師をチームとして支えている他の教師いずれにとっても、それぞれの成長のための学びに繋がる道を選ぶにはどうしたらよいか、まさに「三方よし」の論理を模索し、苦悩する管理職からの聞き取り調査を通して、これまで医師など医療やケア関係の専門職について行ってきた過去の聞き取り調査と比較して、関わる者みなで成長できること、みな学びに繋がることを基本原則として考えようという傾向が教育職には色濃く出てきている。この教育の現場ならではの智慧は、プロフェッショナルの智慧として教育分野から、他の医療、福祉などの分野のプロフェッショナル養成にとっても重要な示唆を与え得る部分ではないかと推測される。

(2)ビデオグラフィーを活用したパフォーマンス分析を行った結果、個々の授業場面での教師の配慮や判断、決断を構成している様々な要素を抽出するとともに、時系列での教師のパフォーマンスと、そのパフォーマンスとして表面化するまでに、教師自身のなかで働いている多様な配慮や判断について時系列で追いながら分析することができた。授業での理解の速度や深度だけでなく、生徒の特性 ここには単に言語を駆使したり理解したりする能力だけでなく、生徒間でのコミュニケーション力あるいは個々の生徒の抱えている得意・不得意意識、さらには過去1週間から数週間、場合によっては数か月、さらには1年以上の経過、その成長発達の度合いなども配慮して教師がとらえた生徒像が含まれる に配慮した生徒の振る舞いの読み取りが教師において、どのような形で行われているかが見えてきた。授業の流れを転換させていく際に、そうした生徒の特性を踏まえたアプローチとしての発問や机間巡視、グループ指導と集団指導の組み合わせ、そのタイミングなどがなされている。また、教師自身の発声や抑揚、話のリズム、共感的うなずきや表情、教室空間での立ち位置、視線の合わせ方、机間巡視の際の生徒へのアプローチの際の身のこなし等々、意識的あるいは無意識的に教師が行っている振る舞いを通して発せられる様々なメッセージを生徒は受け取っている。そうした様々な情報を受け取るなかで、生徒は自らに自信をもったり、あるいは、他の生徒のパフォーマンスを共感的に高く評価するメッセージを発したりといった行為を、教師の共感的振る舞いから学習している(歴史人類学的にはこれを単なる真似ではなく、創造的模倣ミメシスと呼んでいる)。とりわけ、教師が発する様々なメッセージが共感的であったり、挑戦するための勇気ややる気を啓発するものであったりする場合、教師自身の声の調子や身体から発する雰囲気、さらには授業全体に流れる調子やリズムなども大きく関係していることがビデオグラフィーを通して明らかになった。ビデオグラフィーで自己の振る舞いを確認するなかで、教師自身が自らの振る舞いについてかなりの部分で意識的に自己の振る舞いの授業の渦中でのフィードバックを、想像力を駆使して行っていることが分かった。パフォーマンス分析の機会を比較的初任の教師向けに研修の一つの方法として採用していくことの有効性についてさらに検討する価値があるのではないかと考える。

(3)情報機器を活用した教育方法の一新が求められるなか、パンデミックによるオンライン授業の必要性も増しつつある昨今の状況のなかで、教師の学校日常は大きく様変わりしようとしている。AI を活用した授業場面でのグループ活動における生徒の発言の集約など、授業実践を補助するような技術の導入も検討されている。また、Web 上でのいじめが、実際の生活のなかでのいじめと絡みあうようなサイバー世界とフィジカル世界の双方に関わる人間関係をどう受け止めていくかといった問題は既に学校日常の大きな問題となっている。また特別な配慮を必要とする生徒へのきめ細かな対処法が求められるなか、教師の生徒理解や問題状況への対処法、生徒へのアプローチ法の面でも、教育的配慮のみならず医療的な配慮も踏まえた対応が必要となってきた。ICT はじめ AI による教育技術の革新は、教師・生徒間のコミュニケーションをも変容させつつある。こうした技術の成果によるエンハンスメントによって、学習機会の創出や学習方法の進展など新たな歓迎すべき面と同時に、学習や行動履歴のデータ蓄積における個人情報セキュリティの問題や、新たな形での問題状況の発生にも留意しなければならない。本研究では、教師への聞き取り調査のなかで、教師力の熟達における今日的な課題との関わりについても扱った。日本ではドイツ以上に協働での学びや共感的関わりに力点を置く傾向があるため、新技術の投入によるコミュニケーションの変容に対して憂慮する声が多く聞かれた。新技術を最大限に活かし切るような教師力のあり方についてより踏み込んだ研究が今後必要であることが浮き彫りとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 N. Berberich, T. Nishida, S. Suzuki	4. 巻 33(11)
2. 論文標題 Harmonizing Artificial Intelligence for Social Good	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Philosophy & Technology	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s13347-020-00421-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Suzuki, Shoko	4. 巻 29
2. 論文標題 Redefining Humanity in the Era of AI- Technical Civilization	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Paragrana -Zeitschrift fuer Internationale Zeitschrift fuer Historische Anthropologie	6. 最初と最後の頁 83-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 鈴木晶子	4. 巻 46
2. 論文標題 AI技術を活かし切るプロフェッショナルの『タクト』 - 深慮と即妙の実践知	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Medical Science Digest	6. 最初と最後の頁 56-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松浦良充、福田雅樹、鈴木晶子	4. 巻 119
2. 論文標題 A I 技術文明時代に求められる教養を探る 法・倫理・教育にとっての技術革新と人間社会	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 146-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木晶子	4. 巻 27
2. 論文標題 新たな技術文明のための人間性とその力能 - 離散的存在論 (Digital Ontology: DO) の可能性 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 66-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木晶子	4. 巻 2-1
2. 論文標題 AI 時代の技術文明と人間社会 AI 技術と人間の未来	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 情報通信政策研究	6. 最初と最後の頁 1A21-1A43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木晶子	4. 巻 26
2. 論文標題 超スマート社会における人間性と教育	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 122-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 鈴木晶子
2. 発表標題 技術革新のなかの人倫-エンハンスメントと教育の臨界点-
3. 学会等名 日本教育学会課題研究III技術革新とエンハンスメントの時代における教育学の課題-個別最適化された学びは公教育に何をもたらすか、大会開催延期に伴う準備研究会、オンライン開催
4. 発表年 2020年~2021年

1. 発表者名 Suzuki, Shoko
2. 発表標題 Re-definition and Re-construction of Capability/Competency in the AI Era
3. 学会等名 Human-centric AI.2nd French-German-Japanese Symposium (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木晶子、中村泰介、堀雄紀
2. 発表標題 AI技術文明時代の教育可能性とエンハンスメント
3. 学会等名 日本教育学会第78回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木晶子
2. 発表標題 教養と文明を繋ぐテクネ(智恵なすわざ) - AI 技術文明時代を 生き抜くために
3. 学会等名 教育哲学会大会ラウンドテーブル「AI 技術文明時代に求められる教養を探る 法・倫理・教育にとっての技術革新と人間社会 」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shoko Suzuki
2. 発表標題 Mensch sein/ bleiben im Zeitalter der künstlichen Intelligenz
3. 学会等名 Gesellschaft für Historische Anthropologie, Germany (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木晶子
2. 発表標題 人工知能と仕事の未来と教育
3. 学会等名 フランス大使館主催パネルディスカッション（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木晶子
2. 発表標題 新デジタル技術文明と、教育の<いま> - 問われる人間性とその力能
3. 学会等名 教育思想史学会第27回大会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木晶子
2. 発表標題 A I 技術文明の創生と技術倫理教育の今後
3. 学会等名 日本工学会 技術倫理協議会 第13回公開シンポジウム<人工知能と技術倫理> 未来社会に向けての技術者・研究者と社会との協働（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木晶子
2. 発表標題 AI技術文明の創生と人間社会
3. 学会等名 第42回いのちの科学フォーラム市民公開講座（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Kraus, Anja & Christoph Wulf (eds.)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Basingstoke: Palgrave Macmillan. (in progress)	5. 総ページ数 240
3. 書名 The Palgrave Handbook of Embodiment and Learning	

1. 著者名 Joan R. Resina/Christoph Wulf (ed.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Lexington Books	5. 総ページ数 220
3. 書名 Repetition, Recurrence, Returns	

1. 著者名 田中 耕治、矢野 智司、稲垣 恭子、高見 茂	4. 発行年 2017年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 280
3. 書名 教職教養講座第1巻、教職教育論、	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ヴルフ クリストフ (Christoph Wulf)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	Boise State University			
スイス	Zuerich University			
ドイツ	Free University of Berlin	University of Cologne		